

氏名(国籍)	顧	盼	(中国〈台湾〉)
学位の種類	博	士	(文 学)
学位記番号	博	甲	第 1,446 号
学位授与年月日	平	成	8 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当		
審査研究科	歴史・人類学研究科		
学位論文題目	清朝の広東支配成立史の研究		
主査	筑波大学教授	文学博士	片岡 一 忠
副査	筑波大学教授		岩崎 宏 之
副査	筑波大学助教授	文学博士	佐藤 文 俊
副査	筑波大学助教授	文学博士	堀池 信 夫

## 論 文 の 要 旨

本論文は、清朝の中国支配体制確立の最終局面で起こった、三藩の駐屯地域に対する清朝の支配力浸透の一環として、三藩の一つの平南藩が勢力を張る広東省に対する経済的施策を、平南藩との関係を通して考察した研究である。序章、結章と六章、文献目録から構成されている。

「序章」では、まず従来の研究を批判する。すなわち、従来の三藩問題の研究は、反乱の勃発から始まり、軍事的攻防と清朝の成功・三藩側の失敗の原因を探るという問題に集中し、対立状況の中での研究に終始していた。しかし、両者の緊張関係は反乱勃発以前からみられ、清朝は三藩が駐屯地の財政を掌握して自立化することを懸念して、はやくから駐屯地での三藩の財政基盤の確立阻止と清朝の当該地域への経済的支配力浸透を画策していたとし、その対応が、三藩の乱平定と清朝の全中国支配確立に貢献したとする。よって、三藩の駐屯地に対する清朝の経済的施策の研究は、政治的・軍事的側面からの研究に劣らず重要であるとする。本研究でいう清朝の経済的施策(対応)とは、広東省の経済発展や清朝の国庫収入の増加を目的としたものではなく、あくまでも三藩の駐屯地支配を阻止するために、その財政基盤を弱めさらにはその財源を清朝の管理下におくことをねらったものである。すなわち当該地域の政治的支配確立のための手段として採用された経済的側面からの政策をいう。そして、三藩のうち、平南藩を取り上げる理由として、他の二藩がその駐屯地を変更したのに対して、平南藩は一貫して広東省に駐屯し、その支配力を強めていったと考えられるからであるとする。

第一章「平南藩の財政基盤」では、制度的には広東省の軍事指揮権しか与えられていない平南藩が、配下の武職の官を通じて、財政・司法権をも掌握し、当時発展段階にあった広東省の経済活動の活発化による商品流通に介在し、徴税と収奪をもってその財政基盤を形成せんとしていたことを明らかにした。

第二章「平南藩と広塩」では、平南藩が財政基盤として重要視した広塩(広東省内で流通される塩)に対する生産から流通・販売に至るまでの全過程を掌握していた実態を明らかにした。とくに広塩の販路である広東・広西両省塩区を統括する塩官と他の塩区塩官の出身を表示して、広東省下の塩政における平南藩勢力の浸透と清朝の立ち遅れを指摘する。

第三章「清朝の対広塩政策」では、平南藩が掌握した広塩に対する清朝巻き返し策を検討する。すなわち清朝は、第一義的には台湾に拠って反攻せんとする鄭成功等の鄭氏対策として発した遷界令(海岸部の住民を内陸部に移住させる)によって、広東省東部海岸での塩生産を減少させることで、江西省南部の広塩の行塩地を縮小さ

せ、その流通の要路にある常関の太平関の機能をよわめることで、平南藩の財政基盤の一つの塩税収入に打撃を与えたとする。このことは広東省の経済流通に対する清朝の支配を浸透させることにも繋がったのである。

つぎに、平南藩の勢力拡大を阻止するために清朝が注目したものは、広鉄（広東省内の鉄鉱業と仏山鎮の鉄器業）の生産と流通であったとして、清朝の広鉄への対応、平南藩との関係を問題とするが、第四章「明清時代の広鉄の発展」では、明代から清初に至る時期の広東省の鉄鉱業・鉄器業の発展をその鉄鉱石の質、採鉱地の数および鉄炉の規模等について考察し、その全中国のなかで質・量の面で極めて重要な位置を占めていることを明らかにした。

第五章「広鉄をめぐる清朝と平南藩」では、第四章で明らかにされた広鉄の重要性を踏まえて、その広鉄に対する清朝の浸透を平南藩のそれと比較しながら考察する。広塩の利益を掌握した平南藩に対して、鉄鉱業と鉄器業の生産から流通および販売の全過程を掌握することに成功したのは清朝で、平南藩は広鉄をその財政基盤とすることはできなかった。すなわち清朝は軍事力の源泉ともいえる鉄鉱や鉄器製品に関する管理・課税を中央の戸部の管轄下に組み込み、平南藩の軍餉を減らすとともに、平南藩に対抗できる財源を広東省に確保したとする。そこに中央集権化への足がかりを掴もうとする清朝の努力をみることができるといえる。

第六章「太平関移動の歴史的意義」では、康熙八年（1669）に行われた太平関移動の政治的意味を解明する。清初期、広東省と湖南省との交易が活発化していた。清朝は、湖南省ルートの商品流通を掌握するとともに、省内の商品流通に深くかかわっていた平南藩の勢力を排除するためにも、広東省内唯一の常関である太平関を南雄府から韶州府に移動して中央の統制下におき、湖南省ルートだけでなく、省内の山区（鉄鉱石の産地）に繋がる生活物資の流通ルートである連州ルートも把握した。その結果、清朝は広鉄の生産と販売に加えて、その流通過程をも掌握することになり、広鉄に関する平南藩との競合関係で圧倒的に優位な位置を確保したとする。さらに連州ルートの掌握は不平分子集団化する恐れのある山区の鉱山労働者の生命線を抑えることになり、軍事的・治安維持的観点からも清朝の支配力浸透に貢献したという。

清朝は、三藩の乱勃発以前から、三藩の駐屯地に対する軍事的支配力浸透に対抗するために、経済的な側面から三藩駐屯地への浸透・優位性の確立を意図した取り組みをおこなっていた。「結章」では、この立場から確認された各章の論点を総括的に捉えなおして結論とする。

## 審 査 の 要 旨

本論文は、従来の三藩問題の研究が、政治的・軍事的側面からの研究に終始していたことに対し、三藩の駐屯地での財政基盤の確立阻止と清朝の当該地域への経済的支配力浸透という、経済的視点から問題解明に取り組んだ意欲的な研究である。その着眼点ないし観点は斬新で、今後の清朝の支配確立過程の研究に新鮮な刺激を与えられ、まずこの点で高い評価を与えるべきである。つぎに、近年になって中国・台湾所蔵の清朝関係史料、なかでも档案（文書）史料が公開されはじめた。その質量両面での豊富さは目を見張るものがある。本論文は最新の史料を可能なかぎり利用した点で評価できる。また、塩・鉄という中国社会の伝統的重要品目をもって、清朝と三藩の対立関係の中心に据えた点は、問題の性格上意外性を与えたとともに、その分析からは極めて説得性のある結論を導きだしている点は大いに評価されるべきことである。さらに、流通経済の発展にともなって重要視される常関の研究はまだ緒についたばかりであるが、史料的には必ずしも恵まれているといえない太平関の歴史的役割を政治・軍事的側面からはじめて明らかにしたことは、本研究全体に係わる問題として、また今後の研究に寄与するものとして評価できる。日本・台湾の諸機関で精力的に調査・収集した商業書は、本論文では十分に利用されたとはいえないが、著者の今後の常関研究の発展を期待させる貴重な史料である。

しかし、問題がないわけではない。太平関の位置づけの考察にみられる論述の重複は、いま一度工夫があってしかるべきであろう。広塩をめぐる清朝と平南藩の関係を塩官について図表によって分析した点は問題の性格か

ら妥当であるが、平南藩と巡撫・布政使等の行政官職者との関係についても同様の詳細な考察が望まれる。また、清初期からはずれた時期の史料の使用が清初の史料と比べて質的に見劣りする。この点はより適確な史料によって再検討して改善されたい。本論文で検討されていない広東省の土地制度や、三藩のうちの他の二藩（平西藩・靖南藩）に対する清朝の同様の経済的施策に関する研究が、今後の課題として求められよう。

本論文は、残された問題があるとしても、清朝の中国支配体制確立期の問題である三藩政策を経済的側面から解明せんとした研究として、その視点の斬新さ、新史料の利用といった面において、十分独創性があり、学界への貢献が大であると認められる。

よって、著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。